

「断腸亭日乗」に見る「カフェ」「喫茶店」

大村 菜 恵

一、はじめに

荷風の日記、「断腸亭日乗」は荷風の生前に公刊されたが、荷風によって内容、字句を削除または修正されたものであった。そのため、原本「断腸亭日乗」の内容が発表されたのは、岩波書店の第一次『荷風全集』（一九六三—一九六四年）が最初である。「断腸亭日乗」は一九一七年九月一六日（荷風三九歳）から、死去の前日である一九五九年四月二九日（荷風八一歳）までの日記であり、気候、読書記録、外出、食事、交友関係、風俗、物価など様々に記されており、歴史的な資料としても評価されている。

荷風の外出や交友関係、街の風俗に焦点を当て「日乗」を見ていくと、一九三〇—一九四〇年代前半、荷風が頻繁に銀座の喫茶店やカフェを訪れる様子が目に留まる。中でも荷風が長く通った喫茶店が「きゅうべる」である。私家版『墨東綺譚』の校正を担当した広瀬千香の著書『私の荷風記』（日本古書通信社、一九八九年）で喫茶店きゅうべるは「レコードをかけない静かな茶房

で、マスターは荷風の理解者なので、気がおけない為か、最も永づきした店であった」と述べられており、荷風は約四年間きゅうべるに通っていたことがわかる。

本稿ではフィールドワークによって得られた知見をもとに、「日乗」に記されていない荷風の自宅からきゅうべるまでの経路を再現したうえで、荷風のきゅうべるでの交友関係などを見ていく。また一九一一年頃、日本の本格的なカフェの隆盛期には荷風もこれらの店に通っていたことが周辺資料から明らかである。一九〇八年の帰朝からおよそ三年後、本格的なカフェができてから「日乗」の記録が始まる一九一七年の間の空白の期間、荷風がどのようににカフェと関わっていたのかについても検討を加える。

二、関東大震災以前のカフェと荷風

荷風は一九〇八年に帰国し、「日乗」の記録を始めている。「日乗」に初めて銀座のカフェを訪れたことが記されるのは一九一九年七月一二日で、「夜銀座通草市にて花月楼主人に逢ひぶらんな

ん亭に小酌す。」とある。この「ぶらんたん亭」とは一九一一年、日吉町二十番地の元撞球場日吉亭跡地に開店した「カフェープラランタン」を指しており、日本で初めて「カフェー」と名乗った店であった。これ以降では同年九月四日に「帰途松山画伯とぶらんたんに飲む。」とある。この「松山画伯」とは西洋画を学んでいた松山省三のことであり、彼は平岡権八郎とともにフランスのカフェーのように芸術家たちが集える場所を作りたいとプラランタンを作った人物である。プラランタンの開店当初、レストラン以外でお酒とコーヒーを同時に提供する店は当時の日本にはなく、料理も当時としては珍しい西洋料理のメニューをそろえ、それまでのビヤホールや資生堂、台湾喫茶店などは異なる店であった。

松山、平岡はパリ留学の経験を持つ黒田清輝などから本場のカフェーのありかたや、そこでの芸術家たちの様子を聞き、プラランタンを立ち上げた。開店当初はその経営を安定させるために会費五十銭で維持会員を募り、その会員には荷風をはじめとして黒田清輝、森鷗外、岡本綺堂、北原白秋、市川左團次ら著名な文化人が名を連ねていた。奥山儀八郎『珈琲遍歴』（四季社、一九五七年）で松山は「客は主に、お供を連れてくる上流の人々で（中略）当時のお客さんは、珈琲だけ一杯飲んで帰るという人はあまりなく洋菓子とか一品料理とともにたのんだ（中略）つまり高級だった」と述べている。プラランタンは創業者の松山、平岡が目指したカフェーのように、知識人や文化人たちのサロンのような空間となっていたことがわかる。プラランタンの常連の一人であった吉井勇は自身の随筆「青春回顧」（『吉井勇全集』第七巻、番町書房、一九六四年）で「客は多く文士、画家、俳優、その他新聞雑誌関係の人

か、或ひはさう云つた方面に興味を持った人達ばかりで、（中略）夜更けてから芸者連れで来るやうな客も少くはなかつた。」とプラランタンの客について回想している。

プラランタンが開店した五ヵ月後、銀座四丁目に築地精養軒が経営する「カフェーライオン」、同年十二月には銀座七丁目に「カフェーパウリスタ」が開店した。パウリスタはプラランタンのように文化活動の一拠点としても注目された。文学者では水上瀧太郎、菊池寛、久米正雄、徳田秋声、正宗白鳥、芥川龍之介、佐藤春夫らが常連であったといわれている。

パウリスタを愛好したのは文士だけでなく、当時の学生たちも同様であった。慶応義塾に学んだ久保田万太郎は学生時代を回想した随筆の中で、パウリスタを「生野暮」「堅気々々した店」と表現し、多くの文化人の集うプラランタンに比べ、学生でも立ち寄ることのできる雰囲気があると述べている。

この当時、パウリスタで提供されていたコーヒーは一杯五銭、ドーナツも五銭であり「東京で安いもの、時事新報の月給、信盛堂の帽子、パウリスタのコーヒー」と言われるほどと当時としては安価であった。慶応義塾大学の学生時代パウリスタに通った小島政二郎は「青春」（『甘肌』新潮社、一九五四年）において「一杯のコーヒーで、一時間いても、二時間いても、厭な顔をされなかつた。」と述べており、友人と何時間も議論をしたり、作家や記者の会話に聞き耳を立てたりするのに格好の場となっていたのだらう。また久保田は前述の随筆で「銀座への早稲田からの距離、三田からの距離は、後代の文芸史家によって、一応注意せらるべきだ」と述べ、自分自身や水上瀧太郎、小島政二郎、宇野浩二な

どの文学者で学生時代にパウリスタに通った者が多いことを指摘していることから、このようなカフェは文学青年たちにとって刺激の多い場所であつたことが想像できる。

現在でもパウリスタは三田のキャンパスから約三・二キロの場所に位置しており、当時の学生たちは三田通りから増上寺のある芝公園、芝大神宮周辺の路地を通り抜け、現在の国道十五号線へと出て銀座まで歩いた。実際にこの道のりを歩いてみると時間にして約四〇分、一人で歩くには長く感じられる道のりであるが、友人と連れ立って歩けばなんてことのない距離であつたのだらう。

しかし関東大震災後にこれらのカフェは閉店、移転し、それまでのカフェの雰囲気を持つ店は少なくなり、女給のサービスを売りにするカフェが増加した。知識人、文化人のサロンであつプランタン、文学者のみならず文学青年たちの議論の場でもあつたパウリスタなどに始まつた銀座のカフェは、徐々に大衆化していったことがわかる。

荷風が女給のいるカフェを描いた「つゆのあとさき」を発表するのは一九三一年で、日本で本格的なカフェが生まれてから二十年後のことであつた。荷風が外遊中、帰国後にカフェを舞台とした作品を書かなかつた理由として、文壇人との交流を嫌いカフェへ行くことを避けていたことや、帰国後、江戸文化に傾倒する傾向を強めていくことが先行研究で指摘されている。荷風は文壇人との交流を嫌いカフェへ行くことを避けるようになったきっかけを自身の随筆「申訳」の中で述べている。

カツフエープランタンの創設せられた当初、僕は一夕葵山井上啞啞の二友と共に、有楽座の女優と新橋の妓とを伴つて其のカツフエーに立寄つた。入口に近いテーブルに冒険小説家の春浪さんが数人の男と酒を飲んでゐたのを見たが、僕等は女連れであつたから、別に挨拶もせず、そのまゝ、楼上に上つた。僕等三人は春浪さんがまだ早稲田に学んでゐた頃から知合つてゐた間柄なので、挨拶をせずに二階へ上つたことを失礼だとは思つてゐなかつた。就中僕は西洋から帰つてきてまだ間もない頃のことであつたから、女連れのある場合、男の友達へは挨拶をせぬのが当然だと思つてゐた。ところが春浪さんは僕らの見知らぬ男を引連れ、づか／＼二階へ上つて来て、まづ啞々さんに喧嘩を売り始めた。(中略)女優と藝者に耳打ちして、さり気なく帽子を取り、逸早く外へ逃げ出した。後になつて聞いて見ると、春浪さんは僕等三人が藝者を連れて茶亭に引上げたものと思ひ、それと推測した茶屋に乱入して戸障子を蹴破り女中に手傷を負はせ、(中略)これを聞いて、僕は春浪さんとは断乎として交を絶つたのみならず、カツフエープランタンにも再び出入りしなかつた。尾張町の四辻にカツフエーライオンの開店したのも当時のことであつたが、僕はプランタンの遭難以来銀座辺りの酒肆には一切足を踏み入れないやうにしてゐた。

右の文中の「葵山」とは巖谷小波門下の文学者である生田葵山のことであり、「日乗」でも度々名前が挙げられる人物である。また井上啞々も生田と同様に、巖谷小波の木曜会に参加していた

文学者であり、荷風の生涯を通じての親友とも言われる。押川春浪は雑誌『武俠世界』を創刊し、日清・日露戦争のナショナリズムの昂揚を背景に、大衆的武俠英雄冒險小説で人気を得た作家である。自身が中学生の頃から親交があったという吉井勇は前述の随筆において、押川の性格について「烈々たる気魄を蔵してゐて、(中略)向ふつ気の強さが思ひやられる」と述べ、酒を飲んでいるときの気性の激しさについても回想している。

荷風は押川とのこの一件を理由にプランタンに行かなくなったと述べているが、生田や井上のような気心の知れた仲間と過ごすサロンとしての空間において文壇での関係性を強いられることを厭っているようでもあり、荷風が文壇人との交流を嫌う理由を読み取ることのできる資料でもある。また、このとき荷風と同席していた生田も「其の頃のプランタン」(三須裕編『銀座』資生堂化粧品部、一九二一年)にこの事件について綴っている。

私と荷風君が有楽座の新劇を見ての帰途に、偶然に遭つた女優の一人とプランタンの御常連の八重次と一所にプランタンに立ち寄ると、其処に春浪君が阿武天風君と、其れから私等の知らない若い二人と一所になつて居た。押川君の酔が烈しいのと、知らぬ人が其の席に交つて居るのと、其れに此方が女連れなので、其の側を避けて二階へと上つて往つたのであつた。後で判つたが、其れが春浪君には気に入らなかつたのである。漸次すると押川君は上つて来て、私達の側に座つて、盛に永井君と私を罵倒し始めた。(中略)すると階下から何と思つてか、私達が全く知らない男二人が上つて来て私

達の席へ割込むで来た。盃を呉れとばかりに傍若無人の挙動をするのであつた。私達が帰らうとすると、其の若い人は拳を振上げ出した。幸ひ阿武天風君がまだ酔つて居なかつたので、そんな人は制せられて誰も打たれはしなかつたが、其の爲め荷風君と春浪君とは永い間の仲善い交際が暫時途絶えた。

右のように資料を並列すると、荷風と生田の描写には異なる部分が多いことに気づく。生田の記述には井上の名前がなく、阿武天風が押川と同席していたことになっている。騒ぎが大きくなつていく様子にもズレが認められる。また、この事件が起きた年は定かではないが、一九二二年九月一五日号の『週刊サンデー』(臺華社)に「文士と酒場」というゴシップ記事にもこの事件の内容が記されている。

とあるカフェーで、何づれは筆を持つ人らしい連中の一組が盛んに洋酒の満を引いて居たと思ひたまへ、一組の誰もがそろ／＼呂律も怪しくなりかけた時分に、芝居の帰りとも見える二人の若い紳士が二人の美形を連れて這入つて来た、が、酔つた一組の方をチラと見るとソ、クサ二階へ昇つて行つてしまつた、／＼連れられた二人の美形が巴家の八重路と女優の小泉某であることは一同に直ぐと分かつたが、二人の若い紳士に就いては一向知る者が無い、すると一組の中心になつてゐる年長と見えるのが隣の男に、「あれが永井荷風と生田葵さ、」と告げた、隣の男は其れを聞くとヨロ／＼と立ち上が

つて「あなた御存じなら僕を紹介して呉れませぬか、」／「よろしい、」と話は直ぐに纏まり、二人は連れ立って二階へ昇つて行つた／二階は四人の独壇場、(中略)二人の男が、無粋にも昇つて来て「永井君！生田君！僕の友人を紹介するッ」とトロンコ眼で二人の紳士を見比べながら、一方はもどかしがつて「永井君！生田君！」と連りに浴びせかけたが、何時まで経つても返辞すらして呉れないので、とう／＼二人は真赤になつて怒つてしまつた

この後には荷風ら四人がプランタンから逃げ出し、荷風が「申訳」の中で述べたように押川が待合を襲撃する様子が続く。荷風「申訳」、生田「其の頃のプランタン」、右のゴシップ記事では記述それぞれの内容にズレがあることは野口孝一『銀座カフェー興亡史』でも指摘がなされている。

しかし、それぞれの内容の食い違いではない箇所について疑問が生じる。右のゴシップ記事が掲載された週刊誌が一九一二年九月に発行されていることを考えると、この事件はおおよそこの年に起きたのだろうと推測できる。「申訳」において荷風は「僕は春浪さんとは断乎として交を絶つたのみならず、カツフェープランタンにも再び出入りしなかつた」と述べているが、前述したように「日乗」でプランタンの店名が確認できるのは一九一九年七月一二日が最初なのである。つまり「申訳」か「日乗」のどちらか、あるいは両方がフィクションを含んでいる可能性が指摘できる。「日乗」が単なる日記としてではなく、当時の風俗や経済を知るための歴史的な資料として見られる一方で、これまでの研究

において指摘されてきたフィクション性のある日記としての評価についても考慮する必要がある。そして随筆についても同様に見るべきだろう。

生田の随筆、週刊誌の記事では荷風が押川との事件の後、荷風がプランタンに通わなくなったことについては触れられていないが、吉井勇は前述の「青春回顧」においてプランタンには押川をはじめとする酒を飲む「爛酔派」、荷風や生田をはじめとして静かにコーヒーを飲む「静観派」と二つの流派のようなものができ、「終ひには、春浪君が泥酔して大に暴れ廻つて以来、荷風氏が先づ姿を見せなくなり、結局だんだん静観派の連中は、足が遠のくやうになつてしまつた」と述べている。またプランタンの店主は「紫風呂敷の荷風」カツフェー、プランタン主人の見たる永井荷風氏(『荷風全集』別巻、岩波書店、二〇一一年)においてこの事件のことについて(引用者注…荷風が)来られなくなったのは、押川さんとの事件があつてからだ。余程不快に思はれたらしい。」と述べており、「申訳」以外にも荷風が押川との事件以来プランタンに立ち入らなくなったことを記述しているものがある。このことを考慮すると、荷風が「申訳」で「カツフェープランタンにも再び出入りしなかつた」と荷風が述べているのはおおよそ事実であつたということが推測できる。

しかし「日乗」の一九一九年七月一二日の「夜銀座通草市にて花月楼主人に逢ひぶらんたん亭に小酌す。」という記録が完全なフィクションであつたということも難しい。「花月楼主人」とは松山省三とともにプランタンを立ち上げた平岡権八郎であり、彼は料亭花月の三代目であつた。彼は荷風とは清元仲間であり、交

流があったことが知られている。そのことから考えると一九一九年にプラントンに行ったというのは付き合いために仕方がなく、自発的に店に立ち寄ったわけではないため、「申訳」では「カツプエープラントンにも再び出入りしなかつた」と述べているのかもしれない。

このように荷風の日記や随筆がフィクションを含んでいることを考えると、自身が文壇との交流を嫌う理由を自己弁護的に綴ることで読者らがもつ「荷風イメージ」をセルフプロデュースしているようにも読み取ることができさるだろう。

三、喫茶店「きゆうべる」と荷風

前述したとおり、「日乗」をカフェや喫茶店の訪問の記録を中心に見ていくと、荷風が銀座の「きゆうべる」という喫茶店に好んで通っていたことがわかる。通った期間は、一九三三—一九三六年の四年間であるが、ほかの店に比べ訪問頻度が高く、期間も長い。

きゆうべるについては、前述の野口孝一『銀座カフェー興亡史』に詳しい。きゆうべるは、農商務省の試験場で貴金属の研究試験に従事する傍ら、口演童話作家をしていた道明真治郎が一九三二年四月、銀座八丁目金春新道に開店した。レコードをかけ、女給が接客するカフェが流行していた銀座で、「煩雑な用務から頭を休める『街の応接間』」として営業していた。

きゆうべるは、現住所の東京都中央区銀座八丁目七—八にあり、現在はGINZA8というビルが建っている。このビルの管理を

している不動産会社の担当者の方に取材を行ったところ、二〇一五年以前まで建っていたビル名は「きゆうべるビル」であり、そのオーナーは「道明」という姓の女性であったという情報を得ることができた。また「きゆうべるビル」は築五〇年以上が経ち、それ以前に二度建て替えられていたということも明らかになった。

一九四五年一月二七日の有楽町、銀座地区の空襲、いわゆる「銀座空襲」では京橋や茅場町を中心に被害を受けたが、きゆうべるがあった銀座八丁目はその被害を免れた。そして一九五一年出版の岩動景爾『東京風物名物誌』（東京シリーズ刊行会）の銀座八丁目の地図を見るとその店名が残っており、戦後も営業していたことが確認できる。

きゆうべるは荷風の大正初めの新橋花柳界を舞台「腕くらべ」にも登場する金春通りにあった。金春通りは江戸時代この界隈に金春流の能役者の屋敷があったことに由来している。現在この通りには飲食店の入った雑居ビルが立ち並んでいるが、一八六三年に開業した金春湯という銭湯があり、現在も営業している。

荷風の自宅である偏奇館（現在の東京都港区六本木一丁目六一—）はきゆうべるから約二・五キロの場所に位置している。「日乗」では銀座へ出かけた帰り道にきゆうべるに立ち寄るという行動のパターンを確認することができる。荷風は地下鉄や円タクを利用した場合にはその旨を記録している。自宅から銀座への移動についてその記録がないということは、徒歩で移動していたということが推測できる。しかし「日乗」では荷風の作品でしばしば描かれる歩行、移動する身体が描かれることはなく、自宅から銀



座までの詳しい経路やその道途で見えていたものも明らかでないため、この点は「日乗」の空所として指摘できる。

この章では荷風の銀座までの道程、また「日乗」と関連資料から荷風がきゆうぺるをどのように利用していたのか、荷風にとってきゆうぺるとはどのような空間であったのかを「日乗」やその周辺資料から検討し、当時の様子を再現したい。

はじめに荷風が自宅から銀座へ向かう際、どのような道程をたどったのかを検討する。荷風当時の地図から現在でも残っている通りを確認し、想定しうる経路を提示してみたい。

前述したように偏奇館は港区六本木、当時は麻布区市兵衛町一丁目六番地にあり、現在は泉ガーデンタワーの裏手に「港区指定文化財（旧跡）永井荷風旧居『偏奇館』跡」として碑が置かれている。現在この周辺にはアメリカ大使館や駐日スウェーデン大使館、駐日スウェーデン大使館、駐日オランダ王国大使館など多くの公的機関の関係施設があり、この一帯は閑静な印象である。荷風が居住していた当時の資料写真からは偏奇館が眺望の良い崖上に建っていることがわかる。しかし、一九九九年着工の第一種市街地再開発事業によってこの場所の斜面は削られ、旧観を残していない。

実際に偏奇館跡周辺を歩いてみると市街地再開発の後まもなく、古くからの坂が多いことがわかる。偏奇館から南東には幕府御先手組の屋敷があったことに由来する「御組坂」という坂があり、この坂を抜けると駐日スウェーデン大使館、駐日スウェーデン大使館が面する通りに出る。この通りを北東へ歩いていくと、右手に The Okura Tokyo、左手にはアメリカ大使館のある「霊南坂」に

直結する。この坂を下り、右折したところに「汐見坂」があり、この坂を下ると現在の国道一号线「桜田通り」に突き当たる。この通りを北に五〇〇メートル程歩くと、外堀通りと交わった虎ノ門交差点へと出る。虎ノ門交差点を右折、外堀通りを南東へ歩き、新橋駅を抜け、土橋交差点から御門通りへ入る。交差点から見て四つ目が金春通りである。上段の地図は右の経路を当時の地図に書入れ、荷風の偏奇館からきゅうべるまでの道のりを示したものである。

ではこの経路は当時どのような様子であったのだろうか。虎ノ門交差点付近には江戸城の裏鬼門にあたり、一六九七年には虎ノ門金刀比羅宮が置かれた。荷風の当時もこの一帯は琴平町という町名がつけられており、金刀比羅宮が住民に親しまれた場所であったことがわかる。虎ノ門二丁目の交差点付近には乃木希典が一八七九年まで居住していた邸宅跡があり、現在ではそのことを示す碑が置かれている^⑩。また現在では文部科学省がある虎ノ門交差点付近には、明治初期まで江戸城の外堀が存在していた。荷風が歩いていた当時では、外堀は埋め立てられて久しく、路面電車が外堀通りを走っていたことが資料からわかる^⑪。

ここで「日乗」の記録に立ち返る。荷風が初めてきゅうべるを利用したのは一九三三年一月三十一日「旧金春通の喫茶店キユベルに憩ふ。此辺もとは妓家のみにて他の商売をなすものは湯屋車屋くらいなりしが、今はカツプエーおでん屋喫茶店の如きもの多く、妓家は却て稀になりぬ。」と記録されており、この「湯屋」が前述した金春湯だろうと考えられる。この記録の後、四月二回、五月二回、六月七回、七月三回、八月七回、九月六回、一〇月二三

回、十一月二三回、十二月一九回とかかなりの頻度で通っていたことがわかる。翌年では一月二五回、二月一六回、三月一二回、四月一回ときゅうべるに通っている。しかし、四月二六日を最後にこの年はきゅうべるへ行かなくなる。荷風が再びきゅうべるへ行くのは一九三五年三月一日からで、野口前掲書では「きゅうべる通いが復活するのは昭和十年三月八日からである。」と指摘されているが、この日の記録には「喫茶店きゅべるを過ぎてかへる」とあり、店には立ち寄っていないことがわかる。荷風が銀座で食事や買い物をした後にきゅうべるで休憩をして帰宅したり、店の前を通り過ぎて帰宅するというのは他の日の記録にも見られ、銀座から自宅への帰宅のルートとして金春通りを通り抜けたり、時には店を覗いたりしていたのだろう。

そして一九三五年になると、それまでの頻度ではないが三月回、四月六回、五月一回、六月七回、七月三回、八月五回、九月六回、一〇月一二回、十一月三回、十二月五回と定期的に通っていたことがわかる。翌年は、一月六回、二月六回、三月八回、四月三回、五月六回、六月二回、七月四回、八月、九月無し、十月三回、十一月四回、十二月二回であった。銀座へ出かけ、休憩をするためきゅうべるに立ち寄るというパターンが多く見られた。

しかし荷風がきゅうべるに立ち寄るのは静かにコーヒーを飲むただけではない。「晩餐の後きゅうべる喫茶店に往き、諸子と笑語例のごとし。」「喫茶店きゅうべるに至りいつもの諸子と語る。」というような記録が多く見受けられ、「いつもの諸子」と呼ばれる人々との談笑を楽しんでいたことがわかる。では「いつもの諸子」にはどのような人物がいたのだろうか。

当時グルメガイドとして出版された白木正光『大東京うまいもの食べある記』（丸ノ内出版社、一九三三年）においてきゅうべるは「文壇、劇壇人等の集合場所みたいになっていきます」と紹介されており、前述の広瀬千香『私の荷風記』では荷風を取り巻く「いつもの諸子」について言及されている。広瀬が挙げている人物に注釈を加えながらここに書き連ねてみたい。歯科医師の酒泉荷風と親交のあった劇評家、劇作家、小説家岡鬼太郎の弟子である竹下英一。当時のNHKでアナウンサー、記者、フランス語翻訳家として活躍した高橋邦太郎。六本木の鰻屋大和田主人の味沢貞次郎。小山内薫、土方与志らが設立した築地小劇場関係者である萬本。日劇関係の安東。某電機会社のサラリーマンである歌川銀座並木通りの経師屋の阿部。松竹の関係者で戦後東京劇場の支配人になった斎藤。後に八代三津五郎を襲名した役者の襄助。三代目市川段四郎。女優の東山千栄子。

このようにきゅうべるに集まる「いつもの諸子」とは、歯科医師、劇壇、俳優、料理人、職人と様々な分野の人々であったことがわかる。また広瀬は「これら一聯の人々は、表通りをぶらつく事は稀で、大抵は茶房の椅子にくすぶってゐる。時間潰しの雑談は、盛り上がったたり低迷したりであったが、中心は荷風に定まってる」と荷風たちのきゅうべるでの様子を回想している。そのうちの高橋邦太郎は自身の随筆「荷風先生とぼくたち」（『荷風全集』第二十二巻月報、岩波書店、一九六三年）において、右と同じような人々の名前を列挙し、きゅうべるで荷風を囲んだ頃の様子を次のように回想している。

荷風先生を囲んで、雑談に耽っていた。／（略）高尚な議論ではないのは当然で、いわば、ただ、世間話をするだけのことであり、誰を招くというものでもなく、誰が特別に先生の「お気に入り」というわけでもない。（略）先生が、ふらりと夕方姿を現わされて、ぼくらの間に入ってこられる。その時刻まで先生が何を為てこられたかとか、それから先どこへゆかれるかなど、一切、伺いもしないし、また先生から言い出さない限り先生からも聞かれることはない。一言でいえば、何事にまれ先生の身辺の身辺については、大勢の前では聞かないことである。／ともかく、先生は、黙って、ぼくたちの雑談をしずかに聴いておられる。職業がまちまちだったので話題は、まことに種々雑多である。／時には先生もご意見をのべられることもあり、むかし話、人についての思い出を話し出されることもあった。

プランタンでは「静観派」として見られ、文壇との交流を避け、静かな空間を好んだイメージのある荷風であるが右の回想ではそのイメージとは相異なる姿が描かれている。この従来の荷風のイメージは「日乗」や荷風の作品の中から生じたものだと考えられる。「日乗」では「四鄰のラヂオ我に囂然たり」とラヂオの音に苛立ち、音が聞こえてこないときには「四鄰ラヂオの音なく静閑喜ぶべし」という記録が見られる。また自身の作品「深川の唄」では電車に乗った主人公が耳にする様々な騒音を「頭痛のするほど騒わがしい」と表現している。

しかし騒音の中にも「下町の優しい女の話声」や丸髻の美人の

「あざやかな発音」の話し声に耳を傾け、安堵を覚える姿が描かれていた。きゅうべるに集まる二〇—三〇代の青年たちの中で三〇歳以上年の離れた荷風が彼らの雑談を静聴する様子は、「深川の唄」で騒音の中にも安堵を覚えるような話し声を聴いたように、銀座の街中に溢れる騒音から逃れ、落ち着ける空間を求めているようにもある。また「日乗」の記録には「喫茶店きゅうべるの門口をのぞき見たれど、いつもの諸子在らざるを以て直に家に帰る。」「茶店久辺留に立寄りしが、千香女史来るのみなれば十時頃出で、かへる。」とあり、荷風は「いつもの諸子」がきゅうべるにいないことがわかると長居をしないのみならず、立ち寄らないこともあり、仲間たちときゅうべるで過ごす時間を楽しんでいたことが想像できる。

荷風は「いつもの諸子」と歓談を楽しむ以外にも目的をもってきゅうべるを利用していた。「夜きゅうべるにて京屋の児玉氏より金参百八拾参円四銭小切手受納。」「夜銀座きゅうべるに往く。千香女史余が小説すみだ川掲載の雑誌新小説明治四十二年十二月号を貸与せらる。」という記述からはきゅうべるで仕事のやり取りをしていた様子を読み取ることができ、応接間のような空間として使われていることがわかる。きゅうべるの店主である道明真治郎は「銀座裏一夕話」（『荷風全集』別巻、岩波書店、二〇一一年）で「先生は玉の井から帰られると忘れないうちにと、よく玉の井の地図をこまごまと半紙に書いておられましたが、わたしもその下書をいただいたことがあります。」と荷風がきゅうべるで作業をする様子を回想している。荷風が仕事のやり取りをする「応接間」としてだけでなく、書き物をする「書斎」としてもきゅう

うべるを利用していたことがわかる。この様子は当時に流行していたレコードを流し、女給のサービスを売りにしたカフェの空間とは大きく異なっている。さらには荷風に会うべくきゅうべるを訪れる人々も多く、荷風がきゅうべるを利用していたということは周知されていたということもわかる。

しかし荷風は一九三六年一二月を最後にきゅうべるに通わなくなる。それは一度きゅうべるに通わなくなった後、きゅうべる通いを再開させた一九三五年から翌年の記録に読み取ることができ。『銀座に赴き銀座食堂に夕餉を食し、茶店久辺留に立ち寄りしが、今宵は慶応義塾野球勝負の後にて泥酔せる学生の出入り多ければ一茶して後家にかへる』『久辺留の店口を過ぎりしが知る人なく、酔漢のみ多きを以て直に去る。』というような記録が多くなり、銀座の夜道には酔っ払いが多くなると同時に荷風の足がきゅうべるから遠のいていく様子が読み取れる。そして「正月初二日。（略）帰途空庵子と久辺留に立寄り見るに酔漢多く、其中に海軍士官一名水兵一人泥酔するを見れば、直に立去り汁粉屋梅林に少憩して家にかへる。」という一九三七年一月の記録を最後に「日乗」にきゅうべるの店名が「日乗」に記されることはなくなる。

きゅうべるの道明は客への挨拶状に、きゅうべるは街の中に延長された家庭生活の一部であるため、学生も婦人も気軽に利用してほしいとの旨をしたためていたことや、きゅうべるが学生の喫茶店出入禁止の取り締まりの対象店舗とならなかったことから酒に酔った学生の出入りも見られるようになったと推測できる。さらには右の「正月初二日」の記録からわかるようにきゅうべるは

荷風の嫌う軍人までもが出入りする場所となっていた。荷風の好んだきゅうべるの空間は失われ、そのような客と同席すること避けた荷風は、きゅうべるへと足を運ばなくなったのである。

四、おわりに

押川春浪との事件以後、銀座のカフェに立ち寄ることを避けた荷風は「つゆのあとさき」を書き終えた頃からプランタンのように知識人、文化人の集まるきゅうべるへ通い出す。しかしきゅうべるがプランタンと異なるのは荷風の周囲に文壇人がいないことであり、荷風を取り巻く「いつもの諸子」のほとんどが荷風と二〇歳近く歳の離れた若い人々であった。荷風は其中で、彼らの雑談に耳を傾け、時に自分自身も語らった。また仕事のやり取りや、書き物もきゅうべるで行うことがあったという点からは、荷風にとってきゅうべるは「応接間」「書斎」としての空間を兼ねていたことがわかる。「日乗」の中できゅうべるが「カフェ」と書かれないのは、銀座の街の中にありながら自宅の延長であるかのような空間として認識されていたためだろう。

注

- (1) 資生堂ではアメリカのドラッグストアに炭酸飲料などを提供するソーダファウンテンが設置され、アイスクリームと合わせて売られていたことをヒントにソーダ水やアイスクリームを製造し、売り出していた。
- (2) 台湾式の喫茶店で、ウーロン茶などの中国茶を提供する喫茶

店であった。開店当初は華族や代議士、学者が主な客層であった。

- (3) 長谷川泰三『日本で最初の喫茶店「ブラジル移民の父」がはじめたーカフェ・パウリスタ物語』文園社、二〇〇八年、一四八―一五一頁、参照。
- (4) 久保田万太郎『三田文学(3)』『久保田万太郎全集』第十二巻、中央公論社、一九七六年、一〇四頁、参照。
- (5) 同右、参照。
- (6) 同右書、一〇六頁、参照。
- (7) 林信蔵『日本の西欧化、カフェの日本化―永井荷風の文芸表象を中心として―』、『比較文化研究』日本比較文化学会、二〇〇九年三月、三四頁、参照。
- (8) 松田良一「井上啞々と永井荷風」、『椋山女子学園大学研究論集』第十八号、椋山学園大学研究論集編集委員会、一九八七年、五三頁、参照。
- (9) 『コンサイス東京都35区分地図帖 戦災焼失区域表示』日本地図株式会社、一九四六年（東京空襲を記録する会、一九八五年、復刻）、参照。
- (10) 現在虎ノ門二丁目付近は「虎ノ門二丁目地区第一種市街地再開発事業」の一環である地下鉄日比谷線虎ノ門新駅（仮称）の整備が行われており、乃木希典旧居跡の碑を見ることはできない。
- (11) 師岡宏次『東京モダン 1930～1940 師岡宏次写真集』朝日ソノラマ、一九八一年、七四頁、参照。
- (12) 野口前掲書で一九三三、一九三四年の荷風のきゅうべるの訪問回数が月ごとに示されているが、集計の誤りが認められたため、集計し直し訂正する。野口氏は荷風が店に立ち寄った記録以外でも店名が書かれた箇所も数に入れているため、集計結果

に誤りが出たと考えられる。

- (13) 「キユペルに立寄りしに谷崎潤一郎氏来たりて余を待ち居たりしが一足ちがひにて帰られしと云う。」「帰途きゆうへるに至る。邦枝大島隆一の二子余の来るのを俟ちしが先に去れりと云う。」「昨夜またもや勧誘員を銀座金春新道喫茶店きゆうへるに派遣し、演藝会の切符を売付けむと、余の来るを待ちゐたりし由。右茶店より通知の電話あり。」というように「日乗」には右のような記録がみられ、荷風がきゆうへるをよく利用することが知られていたことがわかる。

- (14) 野口前掲書、一九二頁、参照。道明真治郎の挨拶状は個人蔵のものであり、その内容を直接確認することができなかったため、本論考では野口氏の資料の内容を参照した。

- (15) 春峰生「現代学生の飲酒問題」『日本醸造協会雑誌』日本醸造協会、一九三四年、二九巻）では学生のカフェへの出入り禁止について、「警視庁が、その管下の全学生に対して、酒場、カフェー等に入出入ることを厳に禁止すると云ふことであるが、（中略）現時、都市に酒場カフェーの数が急に激増し、それと連関して、学生のそれに入出入り耽溺するもの益々多く、（中略）その社会に及ぼす害を現在並びに将来に及ぼすこと計り知る可からざるものあるを奈何んせんやだ。」と述べられている。

付記 本稿の「断腸亭日乗」「申訳」の引用はすべて『荷風全集』

岩波書店、一九九三—一九九四年による。また改行を示す／は
大村による。本文中に掲載した地図は東京都公文書館の許可を
得た上で、東京郵便電信局作「明治三十年十一月調査東京市京
橋區全圖」「明治二十九年十二月調査東京市芝區全圖」（東京都
公文書館、一九七一年）、「明治二十九年一月調査東京市麻布區
全圖」（東京都公文書館、一九七二年）を加工及び書入れを行っ

たものである。なお、「きゆうへるビル」について取材受けて
くださった株式会社新和不動産野村一郎氏、カフェーパウリス
タに関する文献の情報をご提供いただいた『カフェーパウリス
タ物語』の著者長谷川泰三氏のお力添えに深く感謝申し上げ
る。

（おおむら なえ 本学大学院博士前期課程）